

編集後記

ワールドカップが幕を閉じた。世界中がこの1か月間、熱中した。400億以上の人々が同時にTVを通してこのイベントに参加したのだ。試合の経過も参加国の人々に、時を移さず伝えられ、また、現地の人々の表情も、同時にTVに写し出される。感動や落胆に時間差は無くなった。日本トルコ戦の試合時間には予定手術をはずした病院も多かったとも聞いている。多くの人々にとって、同時にこれほど熱中できる瞬間はこれまで無かったろうし、自分の中に感動できる空間がまだ残っていたと感激した人も沢山おられるだろう。この体験が貴重なだけに、大会が終わったあとの虚脱感も強い。あと4年待たなければ、同じ感動はこない。自分達の周辺にこのイベントに代わり、自分を刺激してくれるものは、そう簡単には見つかりそうにないと感じられたのは私だけではないだろう。今は、その余韻として、活躍した人々の転帰が気になるところである。

ところで、学問的な刺激は継続している。論文を書き上げ、投稿し、査読結果が返ってきて、それがacceptの返事であると「やった！」という感動がある。ワールドカップの感動とは質が異なるが、笑みがこぼれてきて、思わず人に伝えたいくなる方もおられるのではないだろうか？ 特にはじめての論文が採択された時はそう感じるのではないだろうか？ また、指導された先輩の先生方は「ほっと」されるのではなかろうか？ 投稿した論文が最終的にacceptされるまでには、大幅修正後再査読、加筆修正戻しなど、著者に差し戻される。その後、修正された論文が再度提出され、査読させていただき、それがさらに質の高いものになっていると、我々編集委員もよかったと満足するのである。

今回は原著論文1篇、症例報告13篇、臨床経験2篇となっている。昨年の10月から今年の4月末までの編集委員会で取り上げられたもので、編集委員会で指摘された多くの点が加筆修正され、すぐれた論文になっている。

論文にできる素材は日常の臨床中には数多く存在するものである。若い人達は、それを発見できる洞察力と、考察できる頭脳を育ててほしい。また、2006年のワールドカップのひとつときに夢中になれるまで、みんなで切磋琢磨しよう。

(後藤 満一)